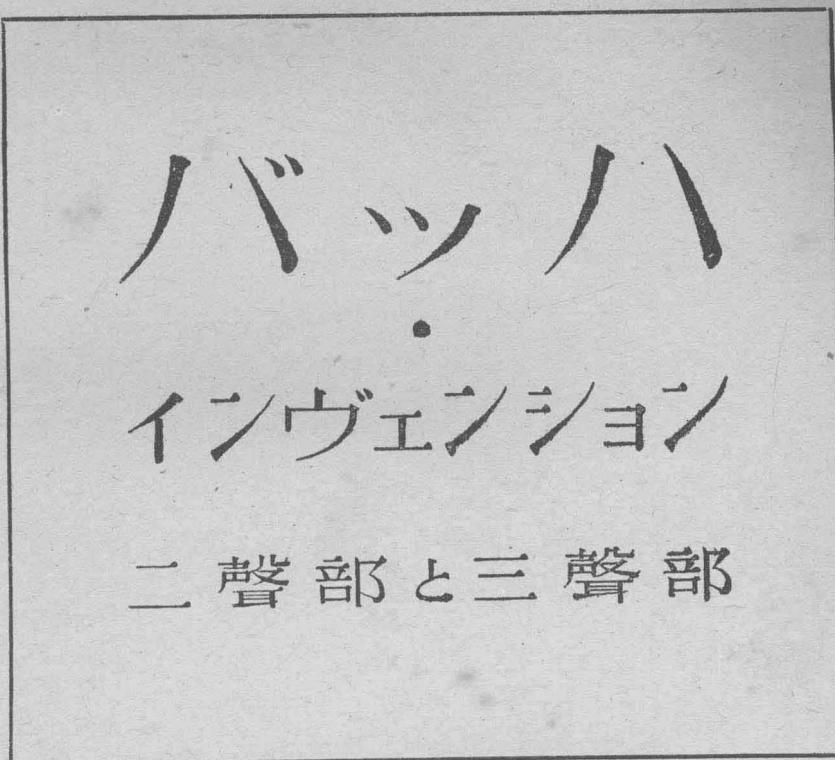


春秋乐譜



東京音樂學校教授 井口基成

東京女高師助教授 土川正浩

東京音樂學校教授 福井直俊

共編

—春秋樂譜—

## 緒 言

ヨハン・セバスチアン・バッハ自筆の原稿は二種あつて、いづれも柏林の國立圖書館に藏せられてゐる。

一つはシュポーアの遺産から出たものであつて、いま一つはグリッペンケールによつて發表せられたものである。此の兩者は裝飾記號に於て全く異なつてゐる。従つてバッハの曲については、裝飾記號が最大の問題となつてゐる。一方の原稿は非常に僅かな裝飾しか持つてをらぬのに、同一曲でありながら、いま一方の原稿は非常に澤山の裝飾を持つてゐる。加之バッハ自身によつて書かれたのでなく、後世の誰かによつて加筆せられたと思はれる裝飾もある。然し今の時代となつて誰もがその個々の裝飾の純眞さについて確言を與へることは出來ないであらう。尙ほバッハは速度記號、發想記號、樂句區分法等を一切與へてゐない。これらのが原因となつて、後世出版された樂譜は編者の智能、技術、趣味によつて千差萬別となつた爲、バッハの研究が起り、“バッハ協會”が設立されて（西暦1851年—1900年）、標準となるべきテキスト刊行の運びとなつた。かくていはゆる“バッハ協會”(Bach-Gesellschaft)版が我々の手に與へられる事となつたのである。

我々編者は此のインヴェンションの中で、此の“バッハ協會”版を原本とし、シュポーアの原稿を第一原稿、グリッペンケールのを第二原稿と呼び、種々の既刊書を研究して此處に發表することとした次第である。裝飾記號に於ては、現在餘り用ひられぬ古い記號などを書き替へた點もある。

尙ほシュポーアの原稿から出た自筆中に我々の座右の銘とすべき次の言葉がある。

“クラビーア愛好家、特に熱心な學習者に、たゞ(I)二聲で純粹に彈くことを教へられるばかりでなく、更に進んで(II)必須の三聲部を正しく、且つ適切に取扱ふための、明確な方法が示され、又良きインヴェンションを得るばかりでなく、同時に十分發展し、特にカンタビレで奏せられるやうになり、尙ほ作曲に對する強い豫感を得られるための明確な方法が示される所の正しい手引である。”

井 口 基 成

土 川 正 浩

福 井 直 俊

昭和十八年二月

バッハ  
・  
インヴェンション  
二聲部と三聲部

東京音樂學校教授 井口基成

東京女高師助教授 土川正浩

東京音樂學校教授 福井直俊

共編

—春秋樂譜—

## 緒 言

ヨハン・セバスチアン・バッハ自筆の原稿は二種あつて、いづれも柏林の國立圖書館に藏せられてゐる。

一つはシュポーアの遺産から出たものであつて、いま一つはグリッペンケールによつて發表せられたものである。此の兩者は裝飾記號に於て全く異なつてゐる。従つてバッハの曲については、裝飾記號が最大の問題となつてゐる。一方の原稿は非常に僅かな裝飾しか持つてをらぬのに、同一曲でありながら、いま一方の原稿は非常に澤山の裝飾を持つてゐる。加之バッハ自身によつて書かれたのでなく、後世の誰かによつて加筆せられたと思はれる裝飾もある。然し今の時代となつて誰もがその個々の裝飾の純眞さについて確言を與へることは出來ないであらう。尙ほバッハは速度記號、發想記號、樂句區分法等を一切與へてゐない。これらのことが原因となつて、後世出版された樂譜は編者の智能、技術、趣味によつて千差萬別となつた爲、バッハの研究が起り、“バッハ協會”が設立されて（西暦1851年—1900年）、標準となるべきテキスト刊行の運びとなつた。かくていはゆる“バッハ協會”(Bach-Gesellschaft)版が我々の手に與へられる事となつたのである。

我々編者は此のインヴェンションの中で、此の“バッハ協會”版を原本とし、シュポーアの原稿を第一原稿、グリッペンケールのを第二原稿と呼び、種々の既刊書を研究して此處に發表することとした次第である。裝飾記號に於ては、現在餘り用ひられぬ古い記號などを書き替へた點もある。

尙ほシュポーアの原稿から出た自筆中に我々の座右の銘とすべき次の言葉がある。

“クラビーア愛好家、特に熱心な學習者に、たゞ(I)二聲で純粹に彈くことを教へられるばかりでなく、更に進んで(II)必須の三聲部を正しく、且つ適切に取扱ふための、明確な方法が示され、又良きインヴェンションを得るばかりでなく、同時に十分發展し、特にカンタビレで奏せられるやうになり、尙ほ作曲に對する強い豫感を得られるための明確な方法が示される所の正しい手引である。”

井 口 基 成  
土 川 正 浩  
福 井 直 俊

昭和十八年二月

# 目 次

## 15 INVENTIONEN

Allegro. 4頁

1. 

Moderato. 6頁

2. 

Allegretto. 8頁

3. 

Allegro. 10頁

4. 

Allegro risoluto. 12頁

5. 

Allegretto. 14頁

6. 

Allegro deciso. 16頁

7. 

Vivace. 18頁

8. 

Allegro moderato. 20頁

9. 

Vivace. 22頁

10. 

Moderato ed espressivo. 24頁

11. 

Allegro con brio. 26頁

12. 

Allegro. 28頁

13. 

Allegretto. 30頁

14. 

Allegro commodo. 32頁

15. 

## 15 SYMPHONIEN

Allegro moderato. 34頁

1. 

Andante con moto. 36頁

2. 

Allegretto. 38頁

3. 

Andante. 40頁

4. 

Andante espressivo. 42頁

5. 

Allegro. 46頁

6. 

Andante molto espressivo. 48頁

7. 

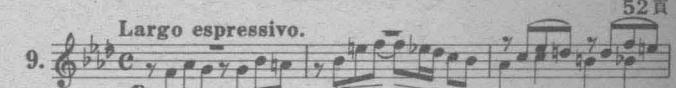
Allegro vivace. 50頁

8. 

Largo espressivo. 52頁

9. 

Allegro. 54頁

10. 

Andantino. 56頁

11. 

Allegro. 58頁

12. 

Andante. 60頁

13. 

Andante con moto. 62頁

14. 

Moderato. 64頁

15. 

# 15 INVENTIONEN.

**Allegro.** ( $\text{♩} = 96$ )

1.



- (I) 原本並に或る版にはVVを用ひてゐるが旋律的動きからみてVVの方が良いと思ふ。
- (II) 此の本音は右手と同音であるから演奏上必ず何れかの一方を省くこととなる。即ち此の場合は右手が主動機を奏するが故に左手の方を省くのであるが、左手の方の形態を失はぬやう注意せねばならぬ。
- (III) 原本には此の裝飾記号がない。
- (IV) パツハの第二原稿及びフリードマン・パツハに従へば此の音は口音(1)になつてゐる。
- (V) 此の本音に對して或版にはVVを附してあるが原本にはない。
- (VI) 此のアルペヂオの記號は原本には附してあるが版によつては無いものもある。此の曲の感覺からして此のアルペヂオの終止音は弱く奏せらるべきではない。由來パツハがアルペヂオを附した音は屢々其の音を強める意味を持つて居ることがあることを附言しておく。

Moderato. ( $\text{♩} = 72$ )

2.

*mf espressivo e legato*

(I)

132

mf

143

23

4 3

2

321

2

312

3

3

2

3

2

1

2

3

4

5

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2

3

4

5

4

3

2

1

2



1 3 2 5 1 3 2 5  
2 1 3 2 4 3 1 2 1 2 5  
3 2 3 4 5  
3 3 3 1 3 2 5 1  
5 1 4 2 4 2 1

(V)

1 3 2 4 1 3 5, 4  
2 1 3 1 2  
f  
3 1 1 321 2  
3 12 1 1

132 1  
143 3, 4  
VI  
1 3 2 1 2 5  
2 1 1 3 1 2  
2

① ②

③ 此の装飾記号はツエルニー版及び多くの他の版には附していないが、それは二小節前の右手の形に則して省いたものであらう。

④ 此の装飾記号は演奏上困難なるを以て省略してもよい。

⑤ 第一インヴェンションの ② を参照。

⑥ 原本には此の装飾記号 wv になつてゐるが、編者は次の奏法を探る。



## Allegretto. (♩=60)

3.

(I) 3 4 5  
II  
III  
IV  
V

IV

V

VI

VII

VIII

IX

① 此の弧はバッハの原稿による。



ツェルニーは次のやうに變へてゐる。



④ バッハの原稿には無いが此の音に顎音を用ひるもよろしい。



Allegro. ( $\text{d} = 72$ )

4.

*f*

*dim.*

(I)

*p*

(II)

*cresc.*

$\frac{1}{18}$



① 此の装飾記号は原稿に無い。

② 13

③ ツエルニーは此の顎音に嬰ヘ音を探るがヘ音(♯)がよろしい。

Allegro risoluto. ( $\text{♩}=84$ )

5.

*f energico*

(II)

(III)

① 第二原稿には終止の裝飾記号以外には何等の裝飾を附して無い。第一原稿の裝飾記号は後に書き込まれたものやうに思へる。

② 此の両小節の前半の變記號は第一原稿には本位記號を記してある。そして後半の同形の音には殊に變記號を示してゐる。

③  ritenuo で弾いた方がよろしい。

### **Allegretto. (♩ = 138)**

14 Allegretto. (♩=138)

6.

*p*

5

*cresc.*

*dim.*

*p*

*p*